A. 宇治市街遺跡（宇治妙楽 13 - 1）発掘調査報告

Ⅰ．調査に至る経過と調査経過

この報告は、宇治妙楽 13 － 1 において計画された宅地造成に先立ち、宇治市教育委員会が実施した宇治市街遺跡の発掘調査の内容と成果を報告するものである。

A. 埋蔵文化財の届出と調査に至る経過・実施

平成 17 年 3 月 3 日付けで幸栄ハウジング株式会社代表取締役三谷知行氏より、中世の集落遺跡である宇治市街遺跡（上記地番内）において宅地造成を行う旨の埋蔵文化財発掘の届出書が提出された。開発計画の概要は、敷地面積 489.23 ㎡に個人住宅 4 棟と宅地内道路を建設しようとするものであった。当該地の調査前は宅地であった。宅地内道路部分については記録保存のための発掘調査を実施することを申し合わせた。

事前に地元町内会の大工町内会にも発掘調査する旨を町内会長通じて回覧して周知し、現地調査を開始した。トレンチは掘削土砂の関係上、南北二か所にトレンチを設置して行った。遺構深度が想定よりも深い地点があり、法面の確保を行う必要性があり、結果的に調査した面的規模は小規模なものとなった。平成 17 年 4 月 18 日に現地の発掘調査に着手し、文化財保護法第 99 条第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の着手通知については同日付けで行った。

調査終了後の翌日から重機による埋め戻しを行い、同日の 5 月 23 日をもって現地での全作業を終了した。5 月 24 日には発掘調査終了届を京都府に提出した。

B.　出土品の措置

発掘調査で出土した遺物は、発掘調査終了後、宇治市歴史資料館に搬入した。

遺失物法に基づく埋蔵物発見届は 5 月 23 日付けで宇治警察署に提出し、京都府教育委員会に対する保管証も同日付けで提出した。これら出土遺物については文化財認定された。

C. 発掘調査終了後の措置

発掘調査終了後は事前の協議に基づき埋め戻しをせずに引渡しを行った。トレンチ外含め、遺構は地下に保全された状態で残されることとなった。

D. 発掘調査報告書の作成等

整理作業と発掘調査報告書の作成は、宇治市歴史資料館が直営で行った。

整理作業にあたっては、遺跡・遺構の時期や特徴の判定にかかる遺物、あるいは遺存度が高く時代的特徴を示す遺物で、報告書作成にあたって必要かつ重要な遺物（A）と、遺存度が低く分析対象としては情報量が少ないため今回の整理では特に必要としないもの（B）とに分別した。数量的にはコンテナ箱にして 70 箱分であった。この発掘調査で作成した記録類及び出土品については、宇治市歴史資料館で収蔵し公開している。

Ⅱ　検出遺構

今回の発掘調査では、主に江戸時代の遺構を検出した。検出面は現地表面から約 1 mである。その間では明確な遺構の検出は認識できなかったが、火災層と考えられる層位が認められ、検出面から現地表面間での歴史的層位の存在がうかがえた。1 m程を重機によって掘削すると遺構らしきものがみられたため、その地点から人力掘削に切り替え調査を行った。黄褐色土の地山層まで、整地土と思われる層位が確認された。以下主要な遺構の説明をしていく。遺構の詳細な年代については遺物の項を参照していただきたい。

SD01　内側幅約 0.4 mの東西方向の石組溝。SD04 の埋め立てが行われた後に構築された。溝の中には 3 本木杭が近接して打ち込まれていた。溝の深さは検出面から約 1.3 mを測る。使用された石材の大きさは大小様々で、南側石組の裏込めには瓦片が充填された部分が認められた。北側石組の一部胴木が底部に設置されているのがうかがえた。溝の底部には砂状のバラスが認められた。石の積み方から上半部に積み直しの状況が確認できる。江戸時代。江戸時代の宇治郷整備に伴って石で組んだ水路と思われる。石組溝の南側では検出面より下げたところ、二列に並ぶ東西方向に石列 A・B が確認できた。石組溝の構築及び整地に伴って造作された遺構であることは間違いないが、その用途は不明。

SD04　SD01 以前に存在していた規模の大きな東西方向の溝。堀ともいうべきかもしれない。検出面での幅は約 7 m、底部は幅約 4.5 mを測る。中世末期の遺物が出土し、江戸時代より遡る。埋土は有機質を多く含む。

SB08　SD01 の南側で検出した礎石建物。礎石と礎石との間に地覆石を据え付けた箇所が認められる。一部の検出のため建物全体の状況は不明。江戸時代。

SD05　石組溝で内側幅は約 0.25 mを測る。江戸時代。

SD06　最大幅約 1 mを測る不定形の溝。土坑の可能性もある。平安時代の遺構である SD07 を切っており、それより後の時期に位置づけられるが、詳細な時期は不明。

SD07　現地表面下約 1.2 mの地点で確認された。溝と理解した遺構。トレンチ壁面で土師器皿が出土し、その部分を拡張して遺構検出を行った。当初のトレンチ範囲では確認することができなかったが状況的には溝が続いていたと理解される。土師器とともに箸や用途不明の木製品等が出土した。平安時代。

第 1 図　発掘作業風景

SK02・SK03　上下に分かれてほぼ同じ位置で検出した円形状の土坑。遺構検出時には二つの遺構の存在に気付かず掘削を一度に行ったが、土層断面で二つの遺構の存在が確認でき、上部を SK03、下部を SK02 とした。調査時で SK03 は直径約 1.8 m、深さ約 0.3 m、SK02 は直径約 1.5 m、深さ 0.8 を測る。いずれも江戸時代。

第２図　発掘調査実施範囲　（昭和５７年測量）

Ⅲ　出土遺物

遺物の総量はコンテナに 70 箱である。出土遺物は 11 世紀後半～ 12 世紀前半のものと、16 世紀後半～現代までのものが見られる。平安時代では土師器皿・瓦・瓦器碗・木製品が出土し、近世では土師器皿・近世国産陶磁器・中国産陶磁器・瓦・瓦質土器・木製品・金属製品・動物遺存体・石製品が出土した。出土遺物は、平安時代では時期的特徴を示すものを中心に、近世以降については土師器皿と主要な近世国産陶磁器を中心に図化、それ以外は写真図版及び表で掲載することとした。特異な遺物としては円盤状加工製品がある。陶磁器・土器を二次的に加工し、主に底部を円盤状としたものである。その性格については今だ定まっていないが散見される遺物でもあるので、日常生活の中で使用された製品として理解し写真で掲示した。ここでは主要な土器・陶磁器類を中心に説明し、箸と瓦については極く簡単に述べておく。なお動物遺存体については、宇治ではあまり出土事例も多くなく興味深い資料といえるため、今回奈良女子大学の宮路淳子氏に同定していただいた。

SD01 埋土 (1 ～ 5)・裏込 (6 ～ 10)　土師器皿・近世国産陶磁器（肥前・唐津・京焼・信楽・瀬戸美濃)・中国産陶磁器・木製品（箸・漆器碗・櫛等）・金属製品（煙管吸口・水滴）などが 10 箱出土した。遺構の重複関係から SD04 より後出で、17 世紀中頃～ 18 世紀頃とみられる。

1 ～ 9 は手づくねの土師器皿であり、いずれも平安京域で出土する土師器皿の器形と類似している。1 は内面に布目痕が残り、口縁部はユビオサエによって成形されている。3･6 は平底気味の底部を持ち、口縁端部外面に施したヨコナデによって直立する。内面のナデが内面底部まで及んでおり、さらに 3 には口縁部に煤が付着している。4･7･8 は平安京域で出土した内面底部に凹状圏線を施す皿と類似している。9 は大型で厚手であり、口径 9.5 ～ 12.5cm と 16.0 ㎝の大小 2 法量見られる。5 は体部がやや丸みを帯び、口縁端部は細く収められている。色調は黄褐色で、口縁内面のナデ上げが顕著である。

10 は西部瀬戸内系の甕の口縁部である。内面にはヨコハケ、外面にはタテハケを施す。SD01 で主体をなす土器群より古相の形態であることから混入したものと推測できる。古墳時代。

SD04(11 ～ 32)　土師器皿・近世国産陶磁器類（肥前・唐津・京焼・信楽・瀬戸美濃）・中国産陶磁器・瓦・瓦質土器（深鉢・浅鉢・擂鉢）・木製品（箸・下駄等）・金属製品（毛抜き・小柄）・石製品（手水鉢）が総量 20 箱出土した。主に 16 世紀末～ 17 世紀前半の時期を示す土器群が多い。

11 ～ 22 は手づくねの土師器皿である。11 は小皿で、口縁部にヨコナデを施す。12 は平底気味の底部を持つ。体部は外反しているが、口縁部にやや内湾するヨコナデを有す。13 の底部は丸みを帯び、外反する口縁部に口縁端部が細く収められている。14･15 は丸みを帯びた体部に口縁部を直立気味に収める。16･20 ～ 22 は口径 10.0 ～ 13.5 ㎝、器高 2.0 ㎝程度。16･21･22 には体部内面にヨコナデが施され、見込み周縁がごくわずかに窪んでいるように見受けられる。16 の口縁部は内湾し、口縁端部はごくわずかに内に入る。20 は凹状圏線が線状に施され、窪みが明瞭化している。口縁端部を細く収める。17 は丸みを帯びた体部を持つ。口縁端部は直立し、さらに煤が付着している。18 は平底の底部で、口縁端部は直立している。19 は薄手のつくりで、口縁部を強く外反させている。11 ～ 16 は溝底、17 ～ 22 は溝埋土より出土した。平安京域で主体をなす土師器皿と類似した土器群(11･16･20

～ 22）と、平安京域では見られない器形の土器群（12 ～ 15･17 ～ 19）が見られ、後者については在地産と考えている。詳細については今後の出土を待って検討課題としたい。

23 は土師器の香炉。24 は三足付の瓦質浅鉢形土器。体部外面周囲にスタンプによる紋様を施す。25 は瀬戸灰釉折縁皿。見込みは蛇の目釉剥ぎ。高台無釉。26 は唐津碗。内面から体部外面中央まで深緑色の釉を施す。27 は二彩唐津壷。体部外面は波状に施釉後､銅緑釉を掛ける。28 は青織部平向付。内底面は鉄絵で梅花文を施し、長石釉を掛けた後、二方に濃い銅緑釉を施す。底部外面は残存で二つの半環足を貼り付ける。29 は志野向付。全体に厚い長石釉を掛ける。半環足の貼り付け高台を有す。内面は草文、内面上半は斜格子状の紋様を施す。30 は志野大鉢。方形の貼り付け高台を有す。体部は赤褐色、高台は白色と胎土の色調が異なる。全体に長石釉を施す。内面は鹿文・草花文を施し、見込み全体にロクロ成形した痕跡が渦巻状になって見える。体部外面下半に 2cm 程の目跡が管見の限り 6 個見られる。SK03 でも同一個体片出土。31･32 はいずれも角型の一木下駄。31 は刳り下駄から差歯下駄へ転用する。歯を釘で打ち付け、接合させる。32 は連歯下駄。表面に焼印を施す。

SK03(33 ～ 39)　木製品（下駄・漆器碗等）・瓦・近世国産陶磁器・中国産陶磁器・土師器皿が 10 箱出土した。33 ～ 36 は手づくねの土師器皿で、34 は口縁端部を外上方に伸ばしており、35･36 は底部見込みに凹状圏線を有する。37 は漆器碗。内面は赤漆、外面は黒漆を施す。38 は土師器高杯の脚部。39 は丸型の連歯下駄。いずれも二次焼成により器表面が銀化している。17 世紀代。

SK09(63)　63 は丸型の連歯下駄。歯が長い。近世。

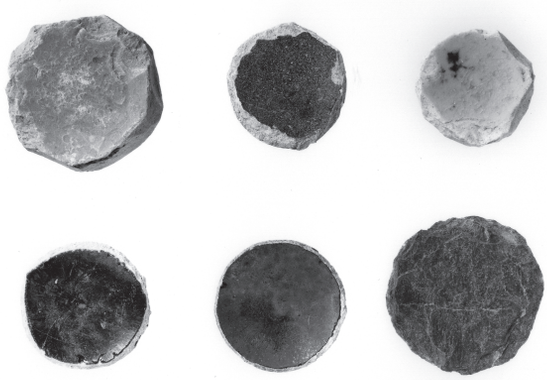
SD07(40 ～ 62)　土師器皿・木製品（箸等）が 5 箱出土した。溝底に密に詰まった状態で検出された。いずれも手づくねの土師器皿である。40 ～ 42 はいわゆる「て」の字形口縁を有する皿で、口径 8.5 ～ 12.0cm に見られ、特に 9.5 ～ 11.5cm が多い。出土量は極めて少ない。口縁端部のつくりが弱く、器形全体が曖昧で肥厚している。43 ～ 45 は口縁部を内に折り曲げたコースター形の皿である。43 は底部周縁がナデにより窪んでおり､44･45 のナデは底部周縁まで及ぶ。口径 9.0 ～ 13.0cm に見られ、特に 10.5 ～ 11.5cm が多い。46 は平底の底部を持ち、口縁部は強く外反する。47 ～ 49 は小皿である。47･48 は底部が平底気味だが､49 は丸みを帯びた底部を有す。50 ～ 52 は平底気味の底部を有す。底部と体部の境が明瞭に屈曲する。53 は口縁部のヨコナデが弱い。口縁端部は細く収める。54･55 は口縁部下端に施された強めのヨコナデにより線状に窪んで見える。54 は口縁端部を強めに外反させることで、口縁端部上面に面を有す。56 は平底の底部に外上方に伸びる体部と外反する口縁部を有す。薄手である。57･59 ～ 62 は器高が高く、皿の系統の中でも深手である。口縁部の外反とヨコナデはやや弱い。体部から口縁部にかけての開きは丸みを帯びながら起き上がってきている。62 は口径に対して深みがあり、杯の系統に属すると考えられる。口縁部をやや外反気味に収める。在地産と考えられる。「て」の字形口縁を有する皿は出土量が減少し、器形が曖昧なものになっている。

コースター形の皿は底部周縁に窪みが見られる古相の要素（43）とそれが見られない新相の形態（44･45）が共伴している。47 ～ 62 の口縁部が外反する皿は、外反が明瞭な土器群と、外反が甘く体部から口縁部が起き始めている土器群が見られる。口径 10.0 ～ 20.0cm まで見られ、大中小の三法量に大別できる。11 世紀末～ 12 世紀初頭頃。

箸　箸については両端が細く削られているものをⅠ類、一方の端が細く削られているものをⅡ類とした。一覧表に示したように平安時代ではⅠ類がほとんどで、江戸時代ではⅡ類が多く認められる傾向を示した。

瓦　瓦は、軒瓦以外の瓦類も出土しているがここでは軒瓦のみ提示する。64 と 71 は平安時代後期のもであるが、その他は室町時代末期から江戸時代を通じてみとめられ、その間に大きな時期幅がある。これらは全く性格の異なる遺構の存在を示すと理解される。また平安時代後期の軒瓦が出土する遺構は後者の時期にあたり、混入品としてみてよかろう。

第３図　平安時代軒丸瓦・軒平瓦



第４図　円盤状加工品製

表１　出土箸計測表

報告番号	写真図版	長さ (cm)	最大幅 (mm)	最小幅 (mm)	分類	出土遺構	トレンチ	時期	備　考
143	11	21.7	6.6	6.0	Ⅰ	SK03	B	江戸	
144	11	残 17.2	7.0	4.5	-	SD01 裏込	A	江戸	
145	11	18.9	6.0	4.0	Ⅱ	SD01 埋土	A	江戸	
146	11	21.1	5.1	4.5	Ⅱ	SD01 埋土	A	江戸	
147	11	24.8	6.0	5.5	Ⅰ	SD04	A	江戸	
148	12	22.7	4.0	3.5	Ⅰ	SD07	B	平安	
149	12	23.4	5.2	4.0	Ⅰ	SD07	B	平安	
150	12	23.2	5.5	3.2	Ⅰ	SD07	B	平安	
151	12	23.2	5.5	4.0	Ⅰ	SD07	B	平安	
152	12	22.0	5.0	3.8	Ⅰ	SD07	B	平安	
153	12	23.2	5.0	3.8	Ⅰ	SD07	B	平安	
-		24.1	8.0	7.0	Ⅰ	SD01 埋土	A	江戸	
-		19.9	5.0	3.0	Ⅰ	SD07	B	平安	
-		19.9	5.0	3.0	Ⅰ	SD07	B	平安	
-		40.4	9.0	5.0	Ⅱ	SD07	B	平安	

表２　動物遺存体一覧表

報告番号	写真図版	大分類	小分類	部　位	部　分	L/R	出土遺構	トレンチ	備　考
180	13	鳥綱	キジ科	上腕骨	近位	L	SD04	A	
181	13	鳥綱	キジ科	足根中足骨	不明	L	SD04	A	
182	13	哺乳類	イヌ	脛骨	骨幹～遠位端	L	SD04	A	
183	13	不明	不明	不明			SD06	B	
-		斧足綱	不明				SD04	A	
-		斧足綱	不明				SD04	A	

Ⅳ　まとめ

今回の発掘調査でいくつかの貴重な成果を得ることができた。小規模の発掘面積でもあり、遺構の詳細な把握にまで至ってはいないが、今後の見通しも含め極く簡単に整理し、まとめとしたい。

平安時代については東西に走ると想定される溝状の遺構 SD07 を検出した。その南隣には現在「伍町通り」と呼ぶ東西に延びる道路がある。これまでのいくつかの発掘成果によって、この道路は古く 11 世紀後半まで遡る可能性がでてきている。いずれにせよ 12 世紀には確実に存在した道路で、平等院西方に藤原摂関家が都市整備を行ったその東西の基幹道路であることは間違いない。SD07 はこの基幹道路の北側溝の可能性を指摘しておきたい。

江戸時代についてみていくと、東西溝である SD01 が注目される。出土遺物は江戸時代前期を中心とするもので、史料や絵図等ではうかがえない当該期の状況を知る上で極めて貴重な遺構・遺物である。この溝の東側には用水路である「井川」が南東から北西方向に向かって流れている。現在、井川は平等院東の宇治川から取水し、宇治の市街地を流れて西方へと流れている。近世とその流路は概ね変化がないとされている。この「井川」は調査地の東近くではほぼ東西方向へと流れている。この延長線上に SD01 が位置する。状況的にみれば今回検出の SD01 はこの「井川」とつながっていたことは容易に予測される。元々の「井川」の流路がこの SD01 であったのか、もしくは流路が分かれその一つが SD01 であったのか断定はできないが、「井川」がいつまで遡るか下層で検出した SD04 の存在含め今後、宇治市街遺跡での重要な課題であることを提示しておきたい。遺物からみれば、江戸時代前期の宇治郷が豊かな経済基盤をもっていたことがうかがえる。宇治の茶師の豊かさを彷彿とさせる資料といえよう。

なお今回検出の遺構とは直接関係はないが、検出遺構の上層に火災層をなす層位が検出された。時期の特定はできないが、元禄 11 年（1698）の宇治郷大火の可能性が指摘される。この大火では当地一帯も火災にあい被害にあっている。火元は御物茶師酒多宗有家で、火は東の宇治郷中心部に広がり、宇治郷の大半を焼きつくした。通称「お亀の大火」と呼ばれる。江戸時代の宇治にとってその火災による経済的影響は極めて甚大で、その火災層の特定は今後の重要な課題である。

江戸時代の宇治も歴史上重要な意義を有していたところであり、平安時代の世界もさることながら、現代社会に息づく宇治茶に関係した宇治郷の人々の生活の実態を明らかにしていくことは、宇治市の文化財行政において大切な業務の一つであると考えられる。

表３　妙楽 13-1 出土遺物一覧表

報告番号	図面図版	写真図版	名称	トレンチ	遺構	備考
1	7		土師器　皿	A	SD01(埋土)	
2	7		土師器　皿	A	SD01(埋土)	
3	7	7	土師器　皿	A	SD01(埋土)	
4	7	7	土師器　皿	A	SD01(埋土)	
5	7	7	土師器　皿	A	SD01(埋土)	
6	7		土師器　皿	A	SD01(裏込)	
7	7	7	土師器　皿	A	SD01(裏込)	
8	7	7	土師器　皿	A	SD01(裏込)	
9	7		土師器　皿	A	SD01(裏込)	
10	7		土師器　甕	A	SD01(裏込)	
11	7		土師器　皿	A	SD04	
12	7	6	土師器　皿	A	SD04	
13	7		土師器　皿	A	SD04	
14	7		土師器　皿	A	SD04	
15	7		土師器　皿	A	SD04	
16	7	6	土師器　皿	A	SD04	
17	7	6	土師器　皿	A	SD04	
18	7		土師器　皿	A	SD04	
19	7		土師器　皿	A	SD04	
20	7		土師器　皿	A	SD04	
21	7		土師器　皿	A	SD04	
22	7	6	土師器　皿	A	SD04	
23	7	6	土師器　香炉	A	SD04	
24	7		瓦質土器　浅鉢	A	SD04	
25	7		国産施釉陶器　折縁皿	A	東壁断割	瀬戸
26	7	6	国産施釉陶器　碗	A	SD04	唐津
27	7	6	国産施釉陶器　壺	A	SD04	唐津
28	7	5	国産施釉陶器　向付	A	SD04	織部
29	7	5	国産施釉陶器　向付	A	SD04	志野
30	7	5	国産施釉陶器　大鉢	A	SD04	志野
31	7	11	木下駄	A	SD04	
32	7	11	木下駄	A	SD04	
33	8		土師器　皿	B	SK03	
34	8		土師器　皿	B	SK03	
35	8		土師器　皿	B	SK03	
36	8		土師器　皿	B	SK03	
37	8	12	漆器　碗	B	SK03	
38	8		土師器　高杯	B	SK03	
39	8	11	木下駄	B	SK03	
40	8		土師器　皿	B	SD07	
41	8		土師器　皿	B	SD07	
42	8	8・9	土師器　皿	B	SD07	
43	8	9	土師器　皿	B	SD07	
44	8	8・9	土師器　皿	B	SD07	
45	8	9	土師器　皿	B	SD07	
46	8	9	土師器　皿	B	SD07	
47	8	8・9	土師器　皿	B	SD07	
48	8	9	土師器　皿	B	SD07	
49	8	9	土師器　皿	B	SD07	
50	8	9	土師器　皿	B	SD07	
51	8	9	土師器　皿	B	SD07	
52	8	9	土師器　皿	B	SD07	
53	8	9	土師器　皿	B	SD07	
54	8	9	土師器　皿	B	SD07	
55	8	9	土師器　皿	B	SD07	
56	8	9	土師器　皿	B	SD07	
57	8	9	土師器　皿	B	SD07	
58	8	8・9	土師器　皿	B	SD07	
59	8	9	土師器　皿	B	SD07	
60	8	9	土師器　皿	B	SD07	
61	8	8・9	土師器　皿	B	SD07	
62	8	8・9	土師器　皿	B	SD07	
63	8	11	木下駄	B	SK09	
64	9		軒丸瓦	A	SD04 断割	本文挿図第３図
65	9	10	軒丸瓦	B	SK03	
66	9	10	軒丸瓦	A	SD01	
67	9	10	軒丸瓦	A	SD01	
68	9		軒丸瓦	A	SD04	
69	9	10	軒丸瓦	A	SD01	
70	9	10	軒丸瓦	B	SK03	
71	9		軒平瓦	A	SD04	本文挿図第３図
72	9	10	軒平瓦	A	SD01	
73	9	10	軒平瓦	A	SD01	
74	9	10	軒平瓦		重機掘削	
75	9	10	軒平瓦	B	壁面精査	
76	9	10	軒桟瓦	B	壁面精査	
77	9		軒桟瓦	B	東壁精査	
78	9	10	軒平瓦	A	SD01	
79	9		軒平瓦	A	SD04	
80	9		軒平瓦	B	SK03	
81	9	10	軒平瓦	A	SD01	
82		5	国産施釉陶器　皿	A	SD04	志野
83		5	国産施釉陶器　水指	A	SD04	織部
84		5	国産施釉陶器　-	A	SD04	織部
85		5	国産施釉陶器　碗	A	SD04	織部
86		5	国産施釉陶器　皿	A	SD04	織部
87		5	国産施釉陶器　向付	A	SD04	織部
88		5	国産施釉陶器　向付	A	SD04	織部
89		5	国産施釉陶器　皿	A	SD04	瀬戸・美濃
90		6	国産施釉陶器　碗	A	SD04	唐津
91		6	国産施釉陶器　碗	A	SD04	肥前か
92		6	肥前磁器　碗	A	SD04	
93		6	肥前磁器　碗	A	SD04	白磁　1640 年～ 1650 年
94		6	肥前磁器　碗	A	SD04	青磁　17c 第２四半期
95		6	中国産磁器　皿	A	SD04	景徳鎮窯　青花
96		6	中国産磁器　碗	A	SD04	青花
97		6	国産施釉陶器　鉢	A	SD04	
98		6	土師器　塩壺	A	SD04	
99		6	国産施釉陶器　壺	A	SD04	
100		6	国産焼締陶器　擂鉢	A	SD04	
101		7	肥前磁器　小杯	A	SD01(裏込)	染付　18c 後半
102		7	肥前磁器　小杯	A	SD01(埋土)	染付　17c 代
103		7	肥前磁器　皿	A	SD01(埋土)	染付　17c 前半
104		7	肥前磁器　碗	A	SD01(埋土)	染付　17c 末～ 18c 初　コンニャク印判と手描き併用
105		7	国産施釉陶器　碗	A	SD01(裏込)	美濃　鉄釉　天目花
106		7	褐釉陶器　壺	A	SD01(埋土)	四耳壺
107		7	国産施釉陶器　皿	A	SD01(埋土)	唐津
108		7	中国磁器　碗	A	SD01(裏込)	色絵　17c
109		7	中国磁器　碗	A	SD01(裏込)	17c 第３四半期
110		7	国産焼締陶器　擂鉢	A	SD01(裏込)	
111		7	国産施釉陶器	B	SK03	志野鉄絵
112		7	肥前磁器　皿	B	SK03	青磁
113		7	肥前磁器　菊皿	B	SK03	染付圏線二条 1640 年～
114		7	肥前磁器　碗	B	SK03	染付
115		7	肥前磁器　皿	B	SK03	染付
116		7	国産施釉陶器　皿	B	SK03	唐津
117		7	国産施釉陶器　皿	B	SK03	唐津
118		7	国産施釉陶器　皿	B	SK03	唐津
119		7	国産施釉陶器　小杯	B	SK03	唐津　16c 前半～ 17c 初頭
120		7	国産施釉陶器　碗	B	SK03	高取
121		7	中国磁器　皿	B	SK03	青花　被熱
122		7	中国磁器　皿	B	SK03	青花　被熱
123		7	中国磁器　皿	B	SK03	青花
124		7	中国磁器　皿	B	SK03	青花
125		7	中国磁器　小杯	B	SK03	青花
126		7	中国磁器　大皿	B	SK03	漳洲窯　青花
127		8	国産施釉陶器　皿	B	SD06	唐津
128		8	中国磁器か　碗	B	SD06	16c 後半 底部墨書「①」の記号
129		8	国産施釉陶器　小皿	B	SD06	瀬戸
130		8	中国磁器　皿	B	SD06	青花
131		8	国産焼締陶器　擂鉢	B	SD06	信楽
132		8	国産焼締陶器　擂鉢	B	SD05	信楽
133		8	国産施釉陶器　汁差し	B	SD05	瀬戸
134		8	国産施釉陶器　碗	A	SB08 基盤面	
135		10	丸瓦		不明	
136		11	木製　毬杖か	A	SD04	
137		11	木製　櫛	A	SD01(埋土)	
138		11	木製　ナイフ形	B	SK03	
139		11	木製　用途不明	A	SD01	
140		11	木製　用途不明	B	SD06	
141		11	木桶底	A	断割	
142		11	撚り紐	B	SK03	
143		11	木製棒状品	B	SK03	
144		11	木製棒状品	A	SD01(裏込)	
145		11	木製棒状品	A	SD01(埋土)	
146		11	木製棒状品	A	SD01(埋土)	
147		11	木製棒状品	A	SD04	
148		12	箸	B	SD07	
149		12	箸	B	SD07	
150		12	箸	B	SD07	
151		12	箸	B	SD07	
152		12	箸	B	SD07	
153		12	箸	B	SD07	
154		12	着け火	B	SD07	
155		12	着け火	B	SD07	
156		12	着け火	B	SD07	
157		12	着け火か	B	SD07	
158		12	木製板材	B	SD07	
159		12	木製板材	B	SD07	
160		12	木製板材	B	SD07	
161		12	木製板材	B	SD07	
162		12	木製板材	B	SD07	
163		12	木製板材	B	SD07	
164		12	木製板材	B	SD07	
165		12	木製板材	B	SD07	
166		12	木製板材	B	SD07	
167		12	着け火	B	SD07	
168		12	着け火か	B	SD07	
169		12	着け火か	B	SD07	
170		12	木製部材	B	SD07	
171		12	木製部材	B	SD07	
172		12	石臼	A	SD04	
173		12・13	金銅製毛抜	A	SD04	
174		13	青銅製煙管	B	SD05	
175		13	青銅製煙管	A	SD01	
176		13	金銅製品（不明）	B	SK03	
177		13	青銅製掛金具	B	SK03	
178		13	鉄製水滴	A	SD01	
179		13	刀子	A	SD04	
180		13	骨	A	SD04	
181		13	骨	A	SD04	
182		13	骨	A	SD04	
183		13	骨	B	SD06	

付載　宇治市街遺跡（宇治妙楽 128-1）発掘調査成果

この報告は、宇治市宇治妙楽 128 － 1 において宇治市消防本部が計画した防火水槽設置に先立ち、宇治市教育委員会が平成 16 年度に実施した宇治市街遺跡発掘調査の成果を報告するものである。

平成 16 年 12 月 20 日付けで宇治市消防本部消防長松本光夫氏より、中世の集落遺跡である宇治市街遺跡に該当する宇治妙楽 128-1 における開発行為に関して、文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項の規定(平成 17 年 4 月 1 日改正前)により届出があった。開発計画の概要は、先述の防火水槽設置であった。

当該地は平等院に近く平安時代の貴族の別業跡が十分想定されるところであるが、遺構の埋没深度が不明であり、今回の開発行為によって遺構・遺物が損なわれる可能性が考えられたため、遺構の詳細な実態を知る点からも発掘調査の必要性を考え、発掘調査対応として協議を行った。

当該計画地の現況は駐車場であった。発掘調査機期間は平成 17 年 2 月 14 日から 2 月 22 日までの短期間で実施した。

現地表面下約 1m を上層遺構、約 1.2 m を下層遺構として調査を行った。溝・小穴・焼土層等を確認した。遺構の詳細な性格は不明だが、遺構から遺物が少量ながらも出土し、宇治市街遺跡の発掘データが少ない現時点において少しでも報告することが重要であると判断し、その遺物を報告するものである。

出土遺物の総量はコンテナに 10 箱程度である。いずれも細片が多く、残存のよいものを中心に選択した。1・7（図面図版 11、写真図版 15　以下同）は SD02、3・5 は SK15、2・4・6 は SD04、8 は黒褐色粘質土、9 は SK07 から出土した。1 ～ 6 は手づくねの土師器皿。1 は底部中央が底上げ状になる。口径 7.0cm。淡灰褐色。2 は口縁を一段ナデにて調整する。口縁部に煤が付着する。口径 8.0cm。淡褐色。3 はやや平底の底部に口縁端部直下が肥厚し、三角状に見える。口径 7.4cm。淡褐色。4 は底部と体部の境が最も薄くなり、窪んでいるように見える。口径 7.6cm。淡褐色。5 は口縁部が外に強く出ている。薄手。口径 11.0cm。淡赤褐色。6 は口径 10.0cm。淡褐色。これらの土師器皿は概ね 14 世紀中頃と考えられる。7 は土師質羽釜。薄手である。口縁部欠損。小型の顎を貼り付けている。顎より以下は全体に煤が付着する。内面は一部煤が付着している。ナデで調整しており、ユビオサエがあまり見られない。8 は赤絵の磁器碗。全体に施釉している。体部には窓絵文を施す。9 は高杯の脚部。10・11 は外区に珠文を密に配する軒丸瓦で、鎌倉時代。12 は蓮巴文の軒平瓦で、顎の形体から鎌倉時代。

B．妙見古墳発掘調査報告

Ⅰ．調査に至る経過と調査経過

この報告は、宇治市菟道妙見９－３番地で計画された宅地造成に先立ち、宇治市教育委員会が実施した妙見古墳の発掘調査の内容と成果を報告するものである。

A. 埋蔵文化財発掘の届出と調査に至る経過

平成 16 年 11 月 26 日付けで、㈱ゼロ・コーポレーションより妙見古墳及びその周辺（上記地番内）において宅地造成を行う旨の埋蔵文化財発掘の届出書が提出された。造成内容は現在みられる地形を大きく改変させるもので、開発地域全体が発掘調査対象と考えられた。

B. 発掘調査

平成 17 年 4 月 11 日に現地の発掘調査に着手し、文化財保護法第 99 条の第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の着手通知については平成 17 年 4 月 11 日付で行った。

発掘面積　発掘調査面積については 327 ㎡を予定したが、現代にかなりの削平を受けていることが確認できたことから面積を小規模にせざるをえなかった。

発掘実施　詰所の設置等の準備作業、竹伐採及び伐根を含む表土除去作業、遺構検出作業、遺構掘削作業、記録作成作業、補足撤収作業の順で行った。表土除去作業は、丘陵であることと竹の密集する竹林であることから機械の搬入が困難であると判断されたため全て人力で行い、後の宅地造成に影響ないことから、発掘調査で生じる掘削残土は横置きした。遺構検出作業は、全て人力で行った。発掘調査の終了は平成 17 年 5 月 26 日であり、平成 17 年 5 月 30 日付で発掘調査終了届を提出した。

C. 出土品の措置

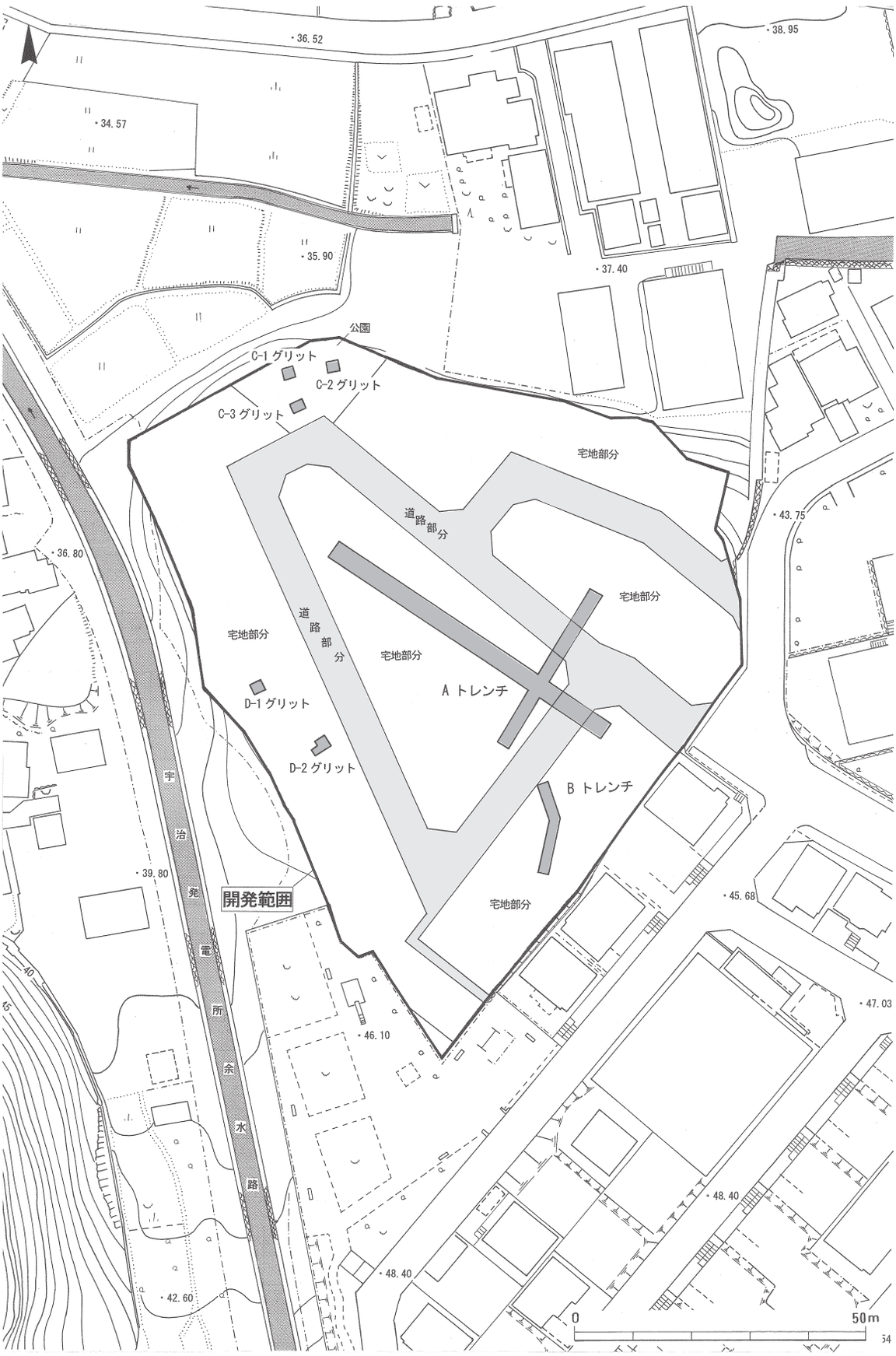
今回の発掘調査で出土した遺物は、調査終了時の収納状態でコンテナバットに陶磁器・瓦・土器が 1 箱分の数量であった。発掘調査終了後、出土遺物は宇治市歴史資料館に搬入した。遺失物法に基づく埋蔵物発見届は平成 17 年 5 月 25 日付で宇治市警察署に提出し、京都府教育委員会に対する保管所も同日付で提出した。これらの出土遺物については、平成 17 年 6 月 20 日付で文化財認定された。

D. 調査終了後の措置

整理作業と発掘調査報告書の作成は、宇治市歴史資料館が直営で平成 17 年度に行った。

整理作業にあたっては、遺跡・遺構の時期や特徴の判定にかかる遺物、あるいは遺存度が高く時代的特徴をよく示す遺物で，当面の報告書作成にあたって必要であるもの（A）と、遺存度が低く分析対象としては情報量が少ないため今回の整理作業では特に要しないもの（B）とに分別した。

第５図　竹林伐根作業風景



第６図　発掘調査実施範囲　（昭和５７年測量）

Ⅱ　検出遺構

調査は、古墳を想定した場合の墳頂部と考えられる地点から東西南北方向にAトレンチを設定した。さらに前回の調査区の隣接する部分に火葬墓を想定し、南側の丘陵頂上部より北にBトレンチを設置した。また、周辺で瓦が確認されていることから瓦窯を想定し丘陵をおりた斜面地にC・Dグリットを計5箇所設置した。

Aトレンチ　基本層序は、表土をはぐとシルトの地山層とな主なり遺構としては、祠と推定される建物の礎石群（SB02）と耕作に伴う溝、中世遺物伴う溝（SD01）があげられる。Aトレンチで検出した礎石は、かつて山頂に社がたてられていたといわれておりそれらに関連する建物であると考えられる。耕作に伴う溝は、建物からなだらかに北西に下る斜面地を耕作地として利用していたことがわかった。また、Aトレンチの北からは中世の遺物を持つ溝が検出された。

この調査区はある時期大きく削平を受けていることが断面より分かった。祠かもしくは神社に関係する建物があったと考えられる。丘頂部から東西方向のなだらかな斜面地はおそらく畑作のため人工的に削平を受けており、それらの削り取った土を主に南側に落としこんでいることがわかった。

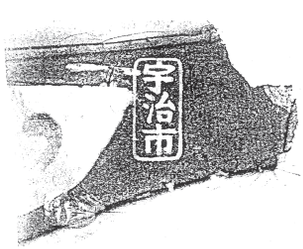
Bトレンチ　基本層序は、現表土地山である。主な遺構としては、溝状の落ち込み等を検出した。近世陶磁器の多くはこのトレンチから出土しており、Bトレンチの丘張部には祠があったことが平成10年度の調査で報告されている。

C・Dグリット　基本層序は、現表土の下に盛土があり、その下に地山がくる。現代に削平を受けており、遺構は見られなかった。

Ⅲ　出土遺物

今回の調査では、最も古い時期を示すもので、中世の軒平瓦であり、主には近世の陶磁器が出土した。以下に各トレンチの主な出土遺物を記載する。

Aトレンチ（写真図版19-1）　調査前の表面採集遺物のなかにもみられるもので、祠もしくは関連の建物があったと考えられるこのトレンチの丘頂部から出土しているのが軒桟瓦である。この軒桟瓦には宇治市という刻印が押されており（第7図）、平等院庭園の発掘の際にも同一の刻印がみつかっている。ただし、平等院では軒桟瓦でなく平瓦が出土しているにとどまるが刻印が同一であることから同一瓦師の作と考えてよいと思う。宇治市は山田源左衛門と共に宇治乙方で瓦師を営んでいた藤田市兵衛の刻印であると考えられる。平等院報告では、この刻印は幕末から明治のものと考えられている。そのほか、近世の陶磁器や鳥居に太陽をかたどった土板などが出土した。



第7図　刻印瓦拓影

Bトレンチ（写真図版19-2）　コンテナ一箱分程の近世陶磁器が出土している。これらの磁器には有田で焼かれたと考えられる磁器も含まれ

ている。また、小型花瓶や内面に施釉した土師皿の中心に稲荷明神の象徴といわれる宝珠を模式的に墨書したもの、お稲荷さんを形作った土人形などもみられ、祠へのお供えもの等で使用した可能性が高い。ここで出土する土師皿は 16 世紀初頭と考えられるものもみられる。

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、古墳を想定できる遺物は一点も確認できなかったが、A トレンチおよび B トレンチから出土した遺物が祠に関係した遺物であったことから、祠が建てられた年代ははっきりしないが、近世からこの丘陵の上に祠が祭られていたことがわかった。

また、今回丘陵全体の地形測量を行った結果、形状は前方後円墳と考えられるような地形をしていることが確認できた（図面図版 15）。しかし、残念ながら丘陵の上面は社や畑地に利用されたためえられており原型をとどめていない。写真図版 19-A トレンチ出土遺物にも掲載したが、須恵器の甕と考え得る破片が丘陵の北斜面で表面採集された。しかし、それ以外に古墳形成時期にあたる遺物として顕著なものは見られないことから、前方後円墳である確証は得られなかった。

C．木幡古墳群（木幡南山畑８他）発掘調査報告書

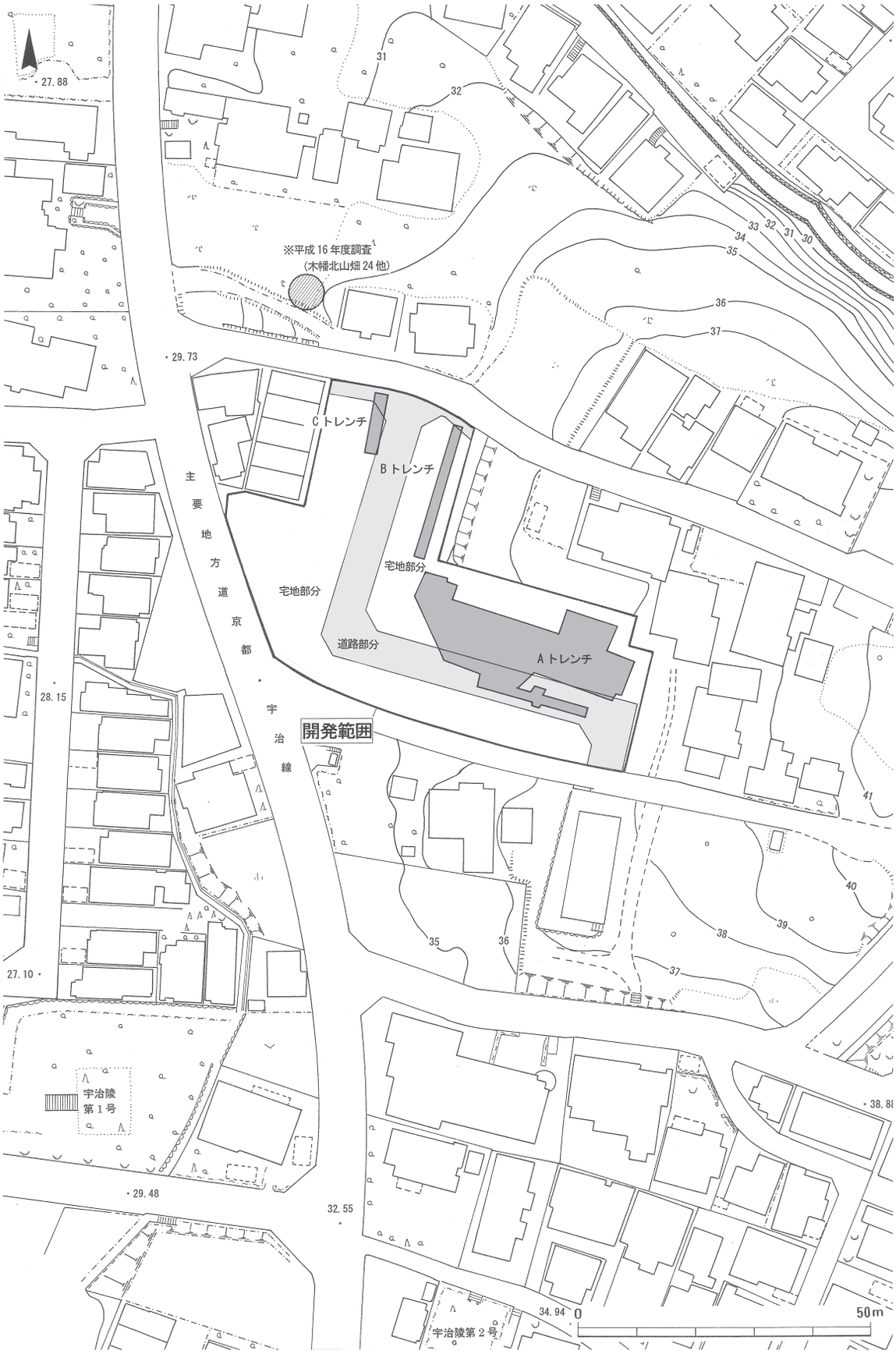
Ⅰ　調査に至る経過と調査経過

宇治市の北端に位置する木幡・五ヶ庄地域は、北に山科川、西に宇治川が流れ、木幡の北西方で合流する。この山科川と宇治川の合流点付近は低湿地帯となっており、現在の木幡池はその名残である。木幡地域は、主に西に向かって緩やかに傾斜する大阪層群と、その西方に広がる沖積地からなるが、木幡北部から六地蔵にかけては緩斜面から低湿地帯へと移行し、安定した沖積地は認められない。木幡南部では木幡池の南方に安定した沖積地や現在の五ヶ庄にあたる扇状地が存在する。大阪層群は西から東に流下する小河川により谷が刻まれ、いくつかの丘陵に分けられている。木幡における遺跡の分布は、大阪層群西端の緩斜面から扇状地・沖積地にかけて集落遺跡があり、丘陵部に古墳や平安時代以後の墳墓群がある。

木幡・五ヶ庄地域の歴史的環境は、二子塚古墳の墳丘盛土内から出土した黒曜石製のナイフ形石器や縄文時代後期の土器を初めとして、晩期の貯蔵穴や土壙墓などが見つかった寺界道遺跡など古い段階から集落が存在することが明らかになっている。弥生時代では、集落遺跡は明らかになっていないものの、寺界道遺跡で前期の土器が出土している。古墳時代に入ると、桃山丘陵上には古墳時代前期後半の黄金塚２号墳が築造され、大型の首長墳が築造される。中期には大型首長墳は断絶するものの、後期初頭には、五ヶ庄に二子塚古墳が築造される。全長 112 ｍの前方後円墳で、二重の周濠を持つ。この二子塚古墳の築造を契機として、古墳東側の丘陵上に木幡古墳群が形成される。現在宮内庁管理の宇治陵の中に約 120 基が残っており、さらにその周囲に削平された古墳の存在が明らかになっている。これらのことから、本来は 200 基程度の古墳からなっていたものと考えられる。

平成 17 年 6 月 23 日付けで、木幡南山畑８他における、文化財保護法 93 条第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出書が、株式会社興和コーポレーションより提出された。当該地は、現況では古墳等は確認できなかったが、木幡古墳群の中でも最も古墳の集中する丘陵にあたっており、平成８年度に東側隣接地で行った発掘調査においても、削平された古墳１基を発見している。この調査では、丘陵南斜面では古墳は発見されず、尾根上にのみ古墳が確認されたことから、当該地においても尾根上に古墳が存在することが予想された。このことから、まず試掘調査を行い、古墳の有無を確認することとなった。そして、試掘調査を実施した結果、重機による表土掘削を開始した段階から埴輪が出土し、また複数の埴輪が出土する溝や土壙墓と思われる土壙なども検出したため、本調査に移行することとなった。

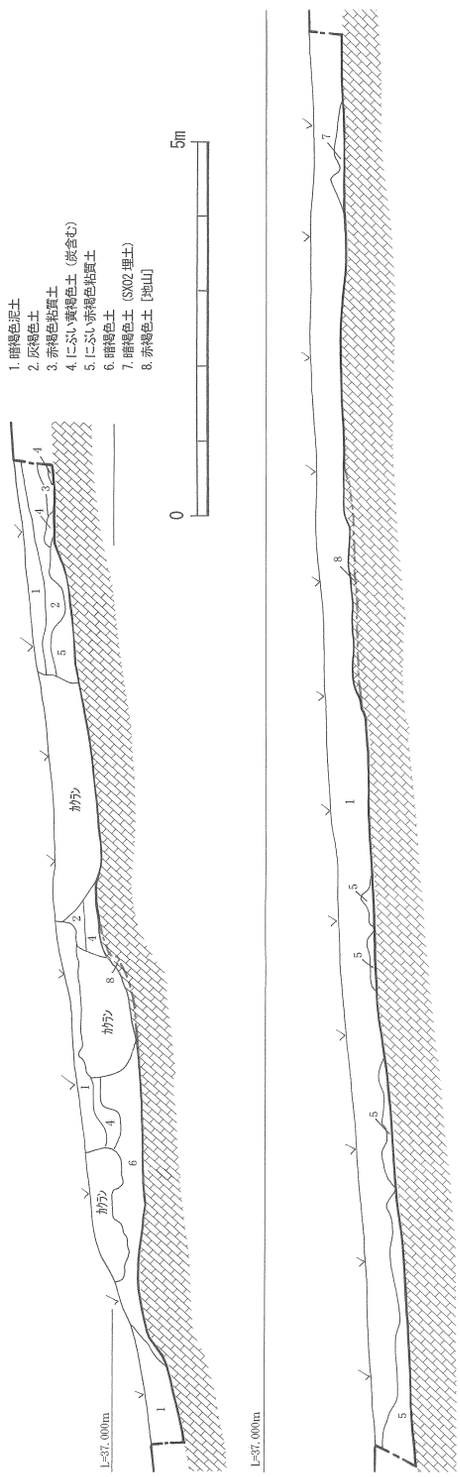
本調査は、平成 17 年８月 30 日から開始し、同年 10 月４日にすべての現場作業を終了した。10 月３日には、現地説明会を開き、発掘現場の一般公開や出土遺物の展示などを行った。調査面積は 450 ㎡である。



第８図　発掘調査実施範囲　（昭和５７年測量）

Ⅱ　検出遺構

基本層序　今回の調査地は、周辺の地形などから復元すると、北半部に西に傾斜する丘陵の尾根線がとおり、南半部は南に下る斜面となっていたものと考えられた。しかし調査前の状況では、敷地の南北線ではほとんど高低差がなく、大規模な造成が行われていることが推測された。このため、試掘トレンチは調査地北半部に重点を置いて設定した。試掘調査は当初４箇所のトレンチを設定したが、Ｌ字形の調査地北西部のＢ・Ｃトレンチでは、表土直下で地山を検出し、すでに削平を受けた状態が認められた。調査地南東部のＡトレンチでも基本的には同様の状況で、大部分は表土直下で大阪層群の地山を検出した。



第９図　Ａトレンチ北壁土層断面図

検出遺構　今回の調査で検出した遺構には、古墳、土壙墓、掘立柱建物、埴輪溜りがある。

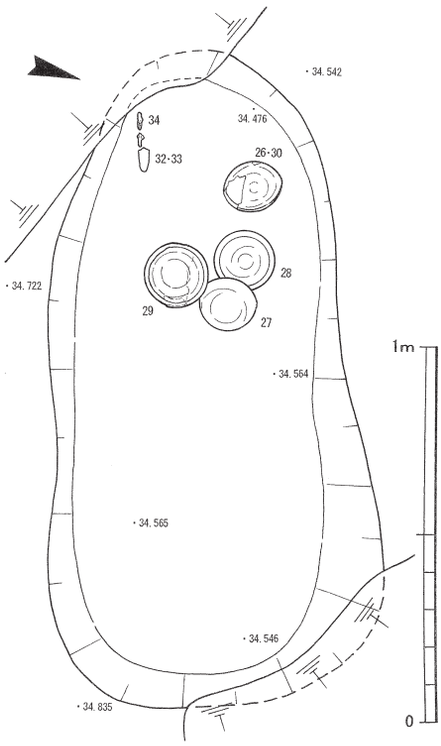
古墳 SX01　調査地東部で検出した。検出したのは全形の５分の１程度で、残りは調査地外に延びている。検出した当初は、埴輪が集中している部分が古墳の周溝と考えたが、浅い溝状の窪みに埴輪が集中していることがわかり、さらにその外側で新たに溝（SD05）を検出したため、この溝が古墳の周溝と判断した。溝 SD05 の検出規模は、長さ 12.0 m、幅 1.0 m、深さ 0.3 mである。溝内からの出土遺物は少ないが、蓋形埴輪の立ち飾り、馬形埴輪と思われる破片が出土している。

埴輪が集中して出土した溝は、南端が攪乱を受けているが、検出長 6.0 m、幅 1.5 m、深さ 0.2 mである。出土埴輪は円筒埴輪や石見形埴輪などがあるが、細片が多いため器形を特定できるものは少なく、また原位置を保つ個体は無い。出土状況から埴輪祭祀を行った場所であることも考えられるが、現時点では性格を特定できない。

墳丘は地山を削り出して成形し、盛土を行ったものと考えられる。これはトレンチ東端で、地山が平坦に成形されている部分があり、おそらくこの上に盛土がなされたものと思われる。埋葬施設に係る遺構は検出しなかった。古墳の本来の規模は、溝 SD05 がきれいな円弧を描いていないため明確ではないが、直径約 26.0m の円墳と考えられる。

埴輪溜り SX02　古墳 SX01 の西側にある埴輪溜りである。試掘調査の段階では、古墳の周溝と考えたが、拡張したと

ころ、南北には広がらず方形の浅い窪みに埴輪が集中していることがわかり、埴輪溜りとして調査を行った。東西 2.7 m、南北 2.1 mの皿状の窪みである。ここからは円筒埴輪、人物埴輪や各種の形象埴輪が出土している。これらの埴輪の中から、奈良時代と思われる須恵器の破片が出土していることから、奈良時代に SX01 などの埴輪を廃棄したものと考えられる。



第 10 図　SX03 実測図

土壙墓 SX03　Aトレンチの西端で検出した土壙墓である。西に傾斜する斜面に土地が改変されており、さらに土壙東端と西端は攪乱を受けている。このため正確な規模は復元し難いが、長さ 1.7 m、幅 0.75 m、深さは東側で 0.3 m、西側で 0.1 mを測る。

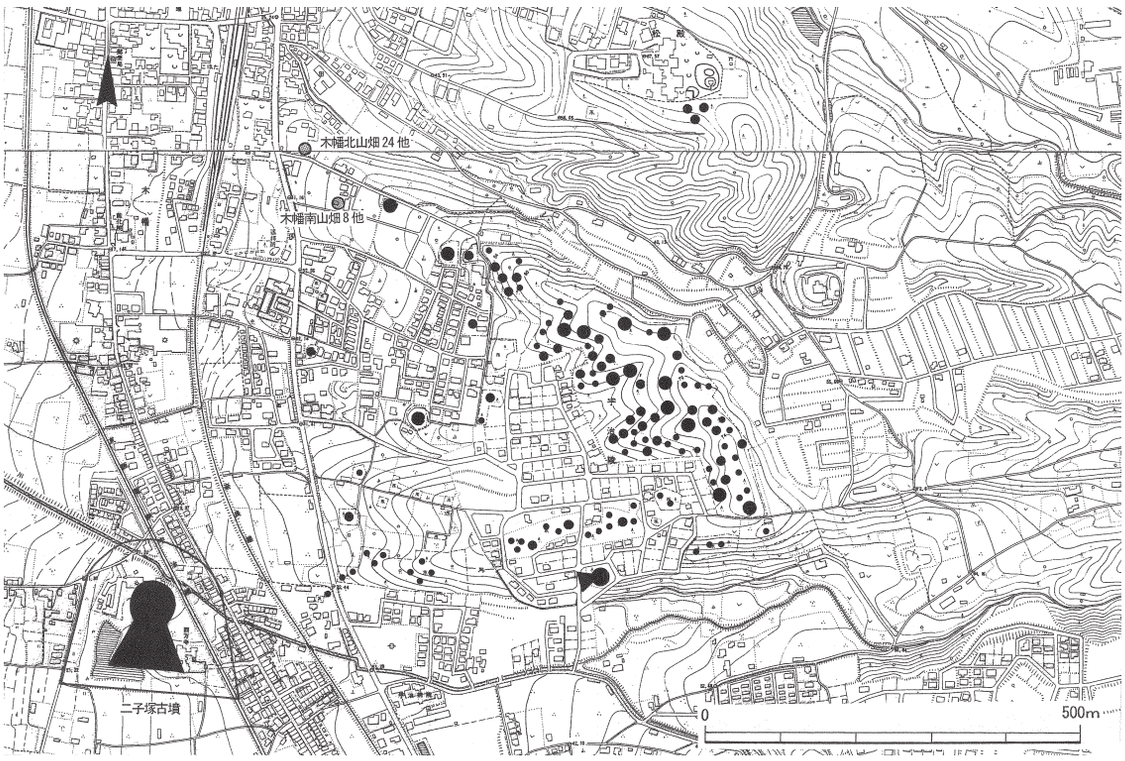
土壙内には須恵器の蓋杯５点と鉄鏃２点が副葬されていた。須恵器は身に蓋を被せた状態で２セットが土壙の主軸に沿って並び、東側のセットの横に身が置かれていた。鉄鏃は２点が上下に重ねられ、先端を東方に向けて置かれていた。土壙の西端で出土しているため、箆があったとは考えられないが、樹皮の口巻の部分があるため、箆を切って副葬したものと思われる。出土レベルに差があることから、鉄鏃は棺内、須恵器は棺上に置かれていたものと思われる。

掘立柱建物 SB04　SX01 と SX03 の間は傾斜が少なくほぼ平坦な面となっているが、遺構検出段階では明確な遺構は確認できず、埴輪片や炭を含む溝状の土質の変化を確認した。当初これを遺構として掘削をはじめたが、土層などの状態から包含層と判断した。そしてこの包含層を掘り下げたところ、柱穴を検出した。建物は２間×３間以上で、建物の南端は攪乱のため確認できない。ピットの中からは埴輪片が出土しており、古墳時代の建物と考えられる。

Ⅲ　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナで 15 箱あり、ほとんどが埴輪である。埴輪類に関しては、円筒埴輪と形象埴輪があるが、形象埴輪については遺存状態が悪く、種類を特定できる個体は少ない。このため、円筒埴輪については図化したが、形象埴輪については写真で提示した。また埴輪の出土位置については別表に示しているが、ここでは SX01、SX02 あわせて記述する。

円筒埴輪（図面図版 19・20、写真図版 23・25）　円筒埴輪は、ほぼ全形が復元できるものが１点のみであるため、全容は明確ではないが、３条の突帯を持つ４段構成になるものと思われる。２段目、３段目に円形の透かしを持つ。外面調整は１次調整のタテハケのみで、内面調整は斜め方向のハケであ



第 11 図　木幡古墳群と二子塚古墳　（昭和 34 年測量、42 年修正）

る。高さは 45 ㎝前後、口径 23 ～ 26 ㎝、底径 16 ～ 19 ㎝を測る。口縁は緩やかに外傾するものと直線的なものがあるが、口縁端部を強くナデを施す点は共通する。7 は、唯一内面に粘土帯を貼り付けたものであるが、これは円筒埴輪ではなく形象埴輪の可能性がある。底部調整は、9 は外面に、10 では内面に、数条の筋状の圧痕が認められる。その圧痕をハケによって寄せられた粘土が覆うことから、上方から下方に向かってハケが施されていることが理解できる。このことから埴輪を倒立させて成形していた可能性が考えられる。

形象埴輪（写真図版 24）　形象埴輪は細片が多く、種類を特定できるものは少ない。わずかに蓋形埴輪、石見型埴輪、馬形埴輪、人物埴輪等が判別できた。蓋形埴輪は、立ち飾り部分の飾り板の一部と思われる破片が出土している。文様の刻線が 2 本の曲線ないし直線が並列しているもの (64・67) とそれらの線の上にほぼ垂直に直線が 1 本刻まれているもの (68) が見られる。文様の刻線と端部の形状から、64 はU字形飾り板の軸受部に近い部分で、67 はその上端部と思われる。43 から 52 は石見型埴輪の破片である。その特徴の一つである鰭部分の穿孔と思われるものと同じ痕跡が見られる (43・44・46・52)。58 は外面上に帯状の張り出し部分があり、鋸歯文が描かれている。この凸出部分は馬具の紐などを表現しているものと思われ、馬装した馬形埴輪の一部と思われる。人物埴輪は腕の一部と思われるもの (59) が見られる。その他に、種類は不明だが、刻線を施されているもの (53・69) や外面に円形の刺突文を施すもの (56・57) が見られる。

須恵器（図面図版 21、写真図版 25）　須恵器は、土壙墓 SX03 から蓋坏 5 点が出土しており、すべてがほぼ完形に近い状態で出土している。26 と 27 が坏蓋で、28 から 30 が坏身である。坏蓋はともに天井部に狭い範囲で回転ヘラケズリを施し、口縁部はほぼ直立的に立ち上がる。法量は、26 が口径

15.0 ㎝、器高 5.0 ㎝、27 が 15.2 ㎝、器高 4.5 ㎝を測る。28 は底部外面に回転ヘラケズリを施し、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。口径 13.0 ㎝、器高 5.4 ㎝を測る。29 は外面の回転ヘラケズリを底部から体部の半分強まで施す。口縁部はやや外反しながら立ち上がる。口径 13.7 ㎝、器高 5.0 ㎝を測る。30 は底部外面に狭い範囲の回転ヘラケズリを施し、内底面には同心円の当て具痕が残る。口径 13.5 ㎝、器高 5.0 ㎝を測る。31 は高坏の脚裾端部で、復元径は 17.0 ㎝である。土壙墓 SX03 から出土した坏蓋は、型式から時期は 6 世紀後半に比定される。

鉄製品（図面図版 21、写真図版 25） 鉄製品は、土壙墓 SX03 より鉄鏃 2 点が出土しており、尖根式鉄鏃と平根式鉄鏃がそれぞれ 1 点ずつ出土している。32 が尖根式鉄鏃で、鏃身に逆刺を持つ腸抉柳葉形を呈す。箆は両側に尖った張り出し部分である「棘」があり、茎は切断されているためか残っていない。残存法量は最大幅が 2.0 ㎝、長さは 9.4 ㎝を測る。33 は平根式鉄鏃で、逆刺を有する平根腸抉式と通称されるものである。片方の逆刺には、逆刺の内側にさらに逆刺がある二重式逆刺の特徴が見られる。残存法量は逆刺部分の幅が 3.5 ㎝、長さが 6.3 ㎝を測る。34 は樹皮の口巻が残る箆の一部である。

Ⅳ　まとめ

今回の発掘調査では、古墳、土壙墓、掘立柱建物を検出した。古墳の検出は当初からの予想通りであったが、同じ墓域内に土壙墓があることや、掘立柱建物を検出したことは、木幡古墳群を考える上で重要である。それはこれまで木幡古墳群については、宇治陵内に残されている古墳と、不時に発見された古墳の情報しかなく、群の構成を推定しうる資料はほとんど無かった。今回の調査や後述する北山畑 24 番地の調査によって、様々な埋葬形態を包摂する古墳群であることが徐々に明らかになってきたのである。

また、平成 8 年度に調査した南山 117 号墳にも見られるように、さほど大型でない古墳にもかかわらず、円筒埴輪のみでなく形象埴輪も持っている点が大きな特徴である。特に今回発見した古墳では、多様な形象埴輪があり注目される。

さらに、木幡古墳群においては、横穴式石室を埋葬施設とするものと、埋蔵施設の形態が不明なものとがあることが指摘されているが、今回の調査や南山 117 号墳の調査でも周辺から全く石材が出土していない。横穴式石室墳の分布を見ると、標高 50 m以上の地点に多いことがわかる。今回の調査成果から考えると内装施設が不明の古墳は、木棺直葬などの竪穴系の埋葬施設の可能性が高いのではないか。また、SX03 と南山 117 号墳出土須恵器を比較すると、明らかに SX03 の須恵器が古く、丘陵先端から順次古墳が築造されていった可能性も考えられる。

付載　木幡古墳群（木幡北山畑 24 他）発掘調査成果

1、はじめに

平成 16 年 7 月 6 日付で、宇治市木幡北山畑 24 番地における埋蔵文化財発掘の届出書が、家城壱他より提出された。当該地は、すでに住宅が建てられており、さらに丘陵の北側斜面にかかることから、古墳が存在する可能性は低いものと思われた。しかし、現地にて地形や遺跡の有無を確認したところ、住宅への進入路沿いに旧地形を掘り残した部分があり、この断面上に露出した状態で須恵器が見つかった。そのことから、何らかの遺構が存在することが判明したため、この掘り残し部分の発掘調査を実施することとなった。調査期間は、平成 16 年 9 月 21 日から翌 22 日の 2 日間で、調査面積は 4.2 ㎡である。

2、調査の概要

2.8m × 1.5m の調査範囲を設定し、発掘調査を実施した。その結果、遺構の存在は明らかにならなかったが、地表面より約 0.7m 下で多量の須恵器・土師器が出土した。その中で特に注目すべきものとして、完形に近い須恵器の器台が転倒した状態で見つかったことである。このことは、器台が本来この場所に置かれていたことを示すものであり、一般的に古墳の横穴式石室の入口前面に置かれる土器の様相と類似する。また、出土した須恵器の大部分は甕であり、坏類がほとんど出土していないことからも、そのような状況がうかがえる。現在通路として切通し状になっている調査地の東側に、かつて古墳の本体があったものと推測され、それに関わる遺物が出土したものと思われる。

3、出土遺物

出土遺物はコンテナバット 2 箱分で、内容物は須恵器と土師器である。器種は、甕・器台・壷が認められるが、大半が甕である。出土した完形に近い器台は、凹線によって区画された 5 段の脚部を持つ。各段には波状文が施され、下部の 3 段には 3 方向の三角形の透かし穴が、上部 2 段には 4 方向の長方形の透かしを持つ。残存高は 45.6 ㎝を測る。主要な出土遺物の時期は、6 世紀中葉から後葉と考えられる。また、8 世紀代の坏や壷もわずかながら出土しているが、これらの遺物は後世に流れ込んだものと考えられる。

4、まとめ

今回の調査では、調査面積が狭小であることから、遺構の全様を把握することはできなかったが、出土遺物の内容から、これまで知られていなかった古墳の存在を推測することができた。調査地の南東約 130m の地点には、ほぼ同じ時期の南山 117 号墳が、さらに南東には 73 基の古墳が集中する 23 号支群があり、これらは同じ丘陵上に所在する。調査地の所在する丘陵は、木幡古墳群中でももっとも古墳の集中する地域であることが明らかとなった。

表４　木幡古墳群（木幡南山畑８他、木幡北山畑 24 他）出土遺物一覧表

報告番号	図面図版	写真図版	器種・器形	出土遺構
1	19		円筒埴輪	SX01
2	19		円筒埴輪	SX01
3	19		円筒埴輪	SX01
4	19		円筒埴輪	SX01
5	19		形象埴輪	SX01
6	19		円筒埴輪	SX01
7	19		円筒埴輪	SD05
8	19		円筒埴輪	SX01
9	19	25	円筒埴輪	SX02
10	19	23	円筒埴輪	SX02
11	19	23	円筒埴輪	SX02
12	20	23	円筒埴輪	SX02
13	20	23	円筒埴輪	SX02
14	20		円筒埴輪	SX02
15	20		円筒埴輪	SX02
16	20		円筒埴輪	SX02
17	20		円筒埴輪	SX02
18	20		円筒埴輪	SX02
19	20		円筒埴輪	SX02
20	20		円筒埴輪	SX02
21	20		円筒埴輪	SX02
22	20		円筒埴輪	SX02
23	20		円筒埴輪	SX02
24	20		円筒埴輪	SX02
25	20		円筒埴輪	SX02
26	21	25	須恵器（杯蓋）	SX03
27	21	25	須恵器（杯蓋）	SX03
28	21	25	須恵器（杯身）	SX03
29	21	25	須恵器（杯身）	SX03
30	21	25	須恵器（杯身）	SX03
31	21		須恵器（杯蓋）	SX02
32	21	25	鉄鏃	SX03
33	21	25	鉄鏃	SX03
34	21	25	鉄鏃	SX03
35	21	26	須恵器（器台）	木幡北山畑 24
36	21	26	須恵器（壺）	木幡北山畑 24
37	21	26	須恵器（壺）	木幡北山畑 24
38	21	26	須恵器（甕）	木幡北山畑 24
39	21	26	須恵器（甕）	木幡北山畑 24
40	21	26	須恵器（杯蓋）	木幡北山畑 24
41	21	26	須恵器（杯身）	木幡北山畑 24
42		26	須恵器（壺）	木幡北山畑 24
43		24	形象埴輪	SX01
44		24	形象埴輪	SX01
45		24	形象埴輪	SX01
46		24	形象埴輪	SX01
47		24	形象埴輪	SX01
48		24	形象埴輪	SX01
49		24	形象埴輪	SX01
50		24	形象埴輪	SX01
51		24	形象埴輪	SX01
52		24	形象埴輪	SX01
53		24	形象埴輪	SX02
54		24	形象埴輪	SX02
55		24	形象埴輪	SX02
56		24	形象埴輪	SX02
57		24	形象埴輪	SX02
58		24	形象埴輪	SX02
59		24	形象埴輪	SX02
60		24	形象埴輪	SX02
61		24	形象埴輪	SX02
62		24	形象埴輪	SX02
63		24	形象埴輪	SX02
64		24	形象埴輪	SD05
65		24	形象埴輪	SD05
66		24	形象埴輪	SD05
67		24	形象埴輪	SD05
68		24	形象埴輪	SD05
69		24	形象埴輪	SB04